

時間と空間を形成する記号過程の暫定的考察 ：文学アーカイブズへの応用に向けて

山田 安仁花（筑波大学大学院図書館情報メディア研究科博士後期課程）

発表要旨：

本研究の目的は、記号は時間と空間を一体不可分のものとして伴うと仮定し、その視点からパースの記号分類を掘り下げて議論することである。

発表者は主たる研究として、日本における文学アーカイブズの課題を検討するにあたって、パースの記号学を導入している。パースの理論によると、記号は対象と解釈項と三項関係を結び、記号を解釈する際には、記号そのものに対する知ならびに記号が指示するものに関する先行知が必要となる。これまでの検討の結果として、複雑な記号原理をアーカイブズの実務に応用するために、より直感的に理解しやすい日本語の概念を用いて、対象をモノ、解釈項をコト、記号を解釈するための二種類の知をトコロとおきかえることとした。慣習として博物館資料はモノ資料、図書館資料はコト資料とされるのに対し、新たな区分としてアーカイブズ資料はトコロ資料であると提案したいと考えている。文学アーカイブズの構築には、様々な地域に散在しやすい文学資料に対して、モノとコトを結ぶトコロ資料としての場所性を付与することが不可欠であると結論付ける方向で進めている（未発表）。

今回の発表では、上記の研究の中で扱っていない第四の概念であるトキをめぐる議論を取り上げる。池上（2007）の説明によると、モノは<具体的／有界的>、コトは<抽象的／無界的>、トコロは<具体的／無界的>な概念とされる。<抽象的／有界的>な概念は池上（2007）により示されていないことから、その特性を担う概念として暫定的にトキをあてはめる。以下で、記号過程を構成する要素としてモノ、コト、トコロの他に、新たにトキが加わる可能性を検証する。

記号のトコロの側面に注目した場合、記号と対象（モノ）の関係に基づく類似記号、指標記号、象徴記号の分類に繋がると考える。池上（2007）がモノは空間的存在であり、コトは時間的存在であると述べていること（p.155）を踏まえると、記号がどのような解釈項（コト）として表れるかに基づく分類は、記号のトキの側面に影響を受けているのではないかという推論が導き出される。パース（1986）は二次性を過去、三次性を未来とみなしている点から、一次性を現在とすると、名辞的記号は現在の記号、命題的記号は現在と過去を結ぶ記号、論証は現在・過去・未来を連結する記号ということになる。記号の生成過程を通して、記号の認識主体が主観的な空間と時間を形成していることが示唆される。

文学アーカイブズに立ち返ると、文学資料は展示の訴求力が弱いことが運営上の大きな課題になっている。トキの要素を意識して、文学を新たな時代に接続できるように探究学習を促す仕組みを作ることで、現在を拠点に過去の資料を未来に継承する持続可能な文学アーカイブズが実現すると考える。

【参考文献】

- ・池上嘉彦（2007）『日本語と日本語論』、筑摩書房。
- ・パース, C.S.著、内田種臣編訳（1986）『記号学』、勁草書房。